大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

エミリー・ディキンソンの「断念」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山津, かおり メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005936

エミリー・ディキンソンの「断念」について

山　津　かおり

Abstract

Many of Dickinson's poems are written on the theme of renunciation. I think that renunciation is the most important theme for Dickinson, that there are two kinds of renunciation, renunciation concerning love and renunciation concerning poetry writing, and that the latter is more important than the former. In this study, I take up a few poems of this kind and examine how this theme is explored in each of them. In sharp contrast, there are very few poems that sing the praises of contentment. As one example of such rare poems, I choose the poem that begins with the line "It's thoughts — and just One Heart." Even in such a poem, I find that Dickinson shows a trace of doubt about contentment. It would seem that she believed that true contentment was to be obtained only after death. In this study, I take up seven poems, Nos. 1291, 439, 421, 213, 495, 408 and 745. Their first lines are, in that order, "Until Desert knows," "Undue Significance a starving man attaches," "A Charm invests a face," "Did the Harebell loose her girdle," "It's thoughts — and just One Heart —," "Unit, like Death, for Whom?," and "Renunciation — is a piercing Virtue —."

ディキンソンの詩には、欲望は満たされないほうがよいということを述べた詩が多い。ディキンソンは現世的欲望を満たさねば気がすまないという世界から、自らを決然と切り離して、事物を見つめた詩を多く書き残している。Helen Plotzは、エミリー・ディキンソン詩集の序で、ディキンソンのCharles Wadsworth牧師に対する愛について、"a love whose fulfillment lay in unfulfillment"[1]と述べている。

ディキンソンの「断念」は恋に限られているわけではない。詩人として、この世で認められることについての断念もあった。Thomas H.Johnsonはディキンソン全詩集の序文の中で、ディキンソンの詩作について、"The dedication to her art had begun before she wrote to Higginson. It was a dedication that led to renunciation of fame in her lifetime...."[2]と述べている。詩作に専念し、途中、恋の道を絶つが、その後、尚一層、ディキンソンは詩作に没頭し、独自の詩の世界を創り上げていくが、詩人として高い評価を得ることはない。それでも尚、ディキンソンは創ることをやめはしない。

"renunciation"、「断念」は、ディキンソンの私的人生に関わる重要なテーマであるが、詩のテーマでもあり、また、彼女に詩作を続けさせる源ともなっている。詩の中で、このような思いはどのように書き表されているのだろうか。まず、1291番の詩を見てみよう。原文は以下のようになっている。

Until the Desert knows
That Water grows

His Sands suffice
But let him once suspect
That Caspian Fact
Sahara dies

Utmost is relative —
Have not or Have
Adjacent sums
Enough — the first Abode
On the familiar Road
Galloped in Dreams — [3)]

第一連では、砂漠が擬人化され、砂漠の存在は対照的な海を知らないことで成り立っていることが書かれている。砂漠は水というものがあると知ると、砂漠として生き続けられない。余計なことは知らないほうがよいという「知ること」の拒否につながっている。更に言えば、水の存在の否定、水を所有することの否定にもなり、そういう意味で、次の連につながっていく。

第二連の前半は、抽象的に書かれていて、意味は難解である。最高の状態といっても、人によって違い、わずかなものしか持たなくても満足している人もいる。持っている、持っていないというのは似たようなものだ、持っていなくてもよいという意味のことが書かれている。"Have not or Have / Adjacent sums"の部分が最もわかりにくい所である。「持っていること、持っていないこと、それらは、隣接した額だから。」と訳せるが、持っていることと持っていないことは、かけ離れていることなのに、さほど変わらない数値だという特異な意識が働いている。世俗的な観点からすれば、思いもかけない表現であるが、「断念」という概念に取り付かれていたディキンソンからして見れば、似通ったものに過ぎないのである。所有は、強く否定されている。

"Enough — the first Abode / On the familiar Road / Galloped in Dreams —"は、「夢の中で、大急ぎで通り過ぎた馴染みの道で、たまたま、最初に見た家で十分だ。」と訳せる。夢自体が非現実的なものなのに、その夢の中で、大急ぎで通り過ぎるというのだから、ますます非現実的なものとなる。道はよく知っているといっても、そこに、たまたま見つかった最初の家というのは、夢の中の家で、非現実的なものである。そのような家で十分だということは、家を持つ必要はないということになり、結局、所有の否定となる。

1291番の詩では、直接的に「断念」という言葉は使われていないが、信念にも近い断念の思いは、水の所有を断念して、生き続けている荒涼とした砂漠の比喩、そして、難解で、大胆な抽象的概念へ、最後には、身近なものではあるが、斬新な比喩へと移っていく。最後の締めくくりの身近さによって、一層、断念の思いの強さは強調されている。

次に、"renunciation"の詩で、批評家も取り上げている詩について見ていこうと思う。まず、439番の詩について見てみよう。原文は以下のようになっている。

Undue Significance a starving man attaches

To Food —
Far off — He sighs — and therefore — Hopeless —
And therefore — Good —

Partaken — it relieves — indeed —
But proves us
That Spices fly
In the Receipt — It was Distance —
Was Savory —

Richard Wilburはこの詩について、次のように述べている。

> This poem describes an educational experience, in which a starving man is brought to distinguish between appetite and desire. So long as he despairs of sustenance, the man conceives it with the eye of desire as infinitely delicious. But when, after all, he secures it and appeases his hunger, he finds that its imagined spices have flown.[4)]

"an educational experience"という表現はこの詩を表面的なものにしてしまう。"desire"と"appetite"が対立されて考えられているが、"desire"は満足させるのが困難な欲望、あこがれのようなもので、"appetite"は比較的容易に満足させることのできる欲求という意味で対立させてあるのだと思われる。しかし、このような語の対照を考えるよりも、独白混じりの前半部と解説的な後半部の比重について考える必要があると思われる。ディキンソンは後半部に比重を置き、しかも、人々への教訓というよりも、自分自身へのものであると考えられる。

この詩の3行目と4行目では、空腹でたまらない男性のため息混じりの言葉が書かれている。「あまりに遠い — だから — 希望がない、だから、よいのだ」と彼は言っている。これは負け惜しみとも解釈できる悲哀に満ちた独白である。第二連目では、解説が加えられている。最後の「距離だったのだ — 味わいがあったのは」という言葉で、物は得られないほうがよいということが言い表されている。前半部が、独白的で、直接的に訴えかけられているだけに、後半の、特に、"Distance"という言葉は、前半についての解説を超えた、意味の深い言葉となっていて、「断念」の詩の一種と捉えることができる。

次に取り上げる二つの詩は、表面上、男女の恋の駆け引きと捉えられてしまう詩であるが、どのように「断念」と関わっているのか、それぞれの詩において考えてみたいと思う。

まず、421番の詩は、以下のように書かれている。

A Charm invests a face
Imperfectly beheld —
The Lady dare not lift her Veil
For fear it be dispelled —

But peers beyond her mesh —
And wishes — and denies —
Lest Interview — annul a want
That Image — satisfies —

第一連では、人の顔は、十分に見られないほうが、魅力があるので、貴婦人はベールを取らないということが書かれていて、恋の駆け引きにベールというありふれた比喩が使われているのかと一瞬思ってしまうが、第二連をよく読むと、この貴婦人の意識は、見られることより、ベールを上げないで、自分自身が人の顔を見ることに向けられていることがわかる。ベールからは見えにくいから、もっとよく見たいのだが、その見たいという欲望をきっぱりと断ち切ってしまっている。ためらいはない。その理由は、「会うことで、心の中の像が — 満たしてくれている — 欠如を無にしてしまうといけないから」なのである。

心の中で、相手の姿を想像しているほうが、相手の顔を完全に見るよりもよいというのである。満足しないほうがよいというのである。欠如感、喪失感があったほうがよいというのである。普通は、ベールは、女性が自分の魅力を引き立たせるための小道具として使うものであるということを十分知っていて、ディキンソンは、一連目において、女性が恋愛の駆け引きを行っていると、読者に思わせるような書き方をしている。そのようにして読者の興味を引きつけておいて、そのような印象が間違いであることを、二連目において読者に悟らせている。これはディキンソンの優れた技巧と言わざるを得ない。

もう一つの詩、213番の詩は、421番の詩よりも、恋愛のテーマを色濃く出しているように思われる。恋人たちは、ミツバチと、イトシャジンというホタルブクロに似た釣鐘状の花の比喩を使って、以下のように描かれている。

Did the Harebell loose her girdle
To the lover Bee
Would the Bee the Harebell *hallow*
Much as formerly?

Did the "Paradise" — persuaded —
Yield her moat of pearl —
Would the Eden be an Eden,
Or the Earl — an *Earl*?

一見、貞操を守るべきかどうか、揺れる乙女心が描かれた、ありふれた恋愛詩かと思ってしまう。

一連目は、仮定法の条件節で始まっている。一連の方は、「もし、イトシャジンが恋するミツバチにガードルを解いたら、」で始まり、もしそうしたら、ミツバチが、以前と変わらずに、崇めてくれるのであろうかと疑問が投げかけられている。一連目は、自然の愛らしい光景と初々しい乙女心の揺れと読めないことはないが、"hallow"という言葉が使われることによって、精神的なものが色濃く出ている。この疑問文は、心の揺れを表すものではなく、

初めから答えがはっきり決まっていて、あえて確認するためのものである。簡単に身を許すようなイトシャジンはミツバチにとってつまらない存在となってしまう。世俗的な愛は成就しない方がよいというディキンソンの固い意志が読み取れる。

二連目も仮定法の条件節で始まり、一連と連続させて読んでしまいそうであるが、むしろ、ミツバチとイトシャジンの比喩を持ち込まずに、読んだほうがよいのではなかろうか。"paradise"は、擬人化されていて、"her"で受けられていて、"pearl"という単語はイトシャジンに降りるであろう露のイメージを想起させるが、ディキンソンのイメージは、イトシャジンとミツバチのイメージから離れて、天界へと一気に飛躍していると考えたほうが、物事は成就しない方がよいというディキンソンのかたくななまでの信念をよりよく理解することができるように思われる。

帰結節にも注意しなければならない。一連目では、イトシャジンに対してミツバチが現れていたのだが、ここでは、ミツバチに当たるものが現れていない。エデンの園に入りたがっているものは明示されていない。それは一般的に人間と考えることも出来ようが、ディキンソン自身と考えた方がよいかもしれない。

最終行では、仮定法の条件節が書かれていなくて、帰結節だけが書かれていると私は考えたい。これまでの二つのイメージから条件節は想像できるのである。簡単に近づけるようでは、"Earl"は"Earl"でなくなる。ディキンソンは恋人のことを"Earl"、「伯爵、身分の高い人、寄り付きがたい人」と呼んでいる。そして、その恋人との愛は成就しない方がよいとディキンソンは言っている。"renunciation"が良いと言っている。Robert Weisbuchは、ミツバチが、"Earl"となり、イトシャジンが、"Paradise"となると言っているが、[5] 私のような解釈をすることにより、すなわち、一連目と二連目に距離を置き、更に、二連目の中の最終行を作者自身の肉声と解釈することにより、"renunciation"の重みがより伝わってくるように思われる。

ディキンソンには"renunciation"の詩が多いが、"contentment"についての詩もないわけではない。そのような詩の一つとして、次の495番の詩を考察してみたい。

It's thoughts — and just One Heart —
And Old Sunshine — about —
Make frugal — Ones — Content —
And two or three — for Company —
Upon a Holiday —
Crowded — as Sacrament —

Books — when the Unit —
Spare the Tenant — long eno' —
A Picture — if it Care —
Itself — a Gallery too rare —
For needing more —

Flowers — to keep the Eyes — from going awkward —
When it snows —
A Bird — if they — prefer —
Though Winter fire — sing clear as Plover —
To our — ear —

A Landscape — not so great
To suffocate the Eye —
A Hill — perhaps —
Perhaps — the profile of a Mill
Turned by the Wind —
Tho' such — are *luxuries* —

It's thoughts — and just two Heart —
And Heaven — about —
At least — a Counterfeit —
We would not have Correct —
And Immortality — can be almost —
Not quite — Content —

この詩は五連からなるダッシュの多い、難解な詩なので、訳をつけながら、ディキンソンは満足をどんなことに見出していたのかを考えてみよう。

まず、一連目を私は以下のように訳す。

思索と — ただ一つの心 —
そして昔ながらの日光が — まわりにある —
それで質素な — 人々は — 満足だ —
そして二人か三人が — 仲間として —
休日にいると —
聖餐式のように — 混雑する —

「ただ一つの心」というのは、自分の心のことである。

二連目は次のようになる。

本はよい — 単一体が —
借家人に十分な時間を — 与える時は —
絵もよい — 心が望むなら —
心はそれ自身 — あまりに稀な画廊で —
これ以上必要ない —

「単一体」というのは、心のこと、「借家人」とは、本のことと考えられる。従って、「単一体が借家人に十分な時間を与える時は」というのは、十分な時間をかけて本を読む余裕が、心にある時という意味になる。

三連目は次のようになる。

花もよい — 雪の時 — 目が変に —
ならないように —
鳥もよい — 目が — 好むなら —
冬の火が — 私達の耳に —
チドリのように — はっきり歌うとしても —

雪で気が休まらないのなら、花を見るのもよかろうし、暖炉の火の燃える音で満足できないのなら、実際の小鳥の姿を求めるのもよかろうとディキンソンは言っている。

四連目は次のようになる。

風景もよい — 目を窒息させるような
大きなものでないのがよい —
丘が一つ — 多分あればよい —
多分 — 風でまわる
風車の横顔があればよい —
このようなものは — 贅沢だが —

最後の連、五連目は次のようになる。

思索と — ただ二つの心 —
そして天が — まわりにあればよい —
少なくとも — まがい物があればよい —
本物は持てないだろう —
そうしたら不死は — ほとんど —
満足できる — 完全ではないが —

ここでは、まず、二つの心というのが問題になる。Rebecca Pattersonは、かつて、部屋を共にしていた人のことを思っているのだろうと言っている。[6] "Heart"が複数になっていないのは、ディキンソンの心と同じ心を持った人だということを表しているのであろう。一番問題になるのは、二行目以下である。ディキンソンは真の満足は死後でなければ得られないと思っている。思索によって生み出される自分の詩も、死後でなければ認められないと思っている。"Immortality"を私は「不死」と訳したが、死後のことを思う心である。"contentment"のことを歌いながら、結局は"renunciation"を歌っていることになると考えられる。自分で"Heaven"がまわりにあればよいと言っておきながら、"Heaven"という言葉を軽々しく使うものではないということを述べているとも考えられる。

この詩の第二連で扱われている"Unit"を私は心と考えた。この場合の心は"mind"としての心だと考えられる。"Unit"という単語を用いた詩はこの詩と408番の詩だけである。408番の詩では、"heart"としての心が扱われていると思われる。408番の詩を吟味してみたい。

Unit, like Death, for Whom?
True, like the Tomb,
Who tells no secret
Told to Him —

The Grave is strict —
Tickets admit
Just two — the Bearer —
And the Borne —
And seat — just One —
The Living — tell —
The Dying — but a Syllable —
The Coy Dead — None —
No Chatter — here — no tea —
So Babbler, and Bohea — stay there —
But Gravity — and Expectation — and Fear —
A tremor just, that All's not sure.

訳してみると、以下のようになる。

死のような、心は、誰のため？
真実だ、墓のように、
墓は自分に語られた
秘密をばらさない —
墓場は厳しい —
切符が入れてくれるのは
二人だけ — 運ぶ人と —
運ばれる人 —
そして座らせるのは — 一人だけ —
生きている人達は — しゃべる —
死に瀕した人達は — 一音節だけ —
はにかみ屋の死者たちは — 何も言わぬ —
ここでは — おしゃべりも — お茶もない —
だから饒舌家も、— 武夷茶も — 来るな
重々しさ — 期待 — そして恐れ —
すべてが確かとは言えないという震えが少し。

「死のような心」というのは、失恋を意味し、「誰のため」というのは、恋人ということである。この失恋は普通のものではなく、命を失うほどのものであり、思いは、「墓」に及ぶ。墓は、すべてを封印し、恋人たちの秘密をばらすこともない。墓には、生きている人達はもちろん、死に瀕している人達も入ることはできない。音のあふれた世界とは、遮断された世界である。ディキンソンは、この世に生きているものの、死んで墓に入っているような気持ちになっていて、誰にも恋心を打ち明けることもなく、恋人が死んで墓に入ってくるのを待っている。ディキンソンは恋人とこの世で結ばれることはないと考え、この世を捨てている。つまり、“renunciation”の状態に入っている。二人が結ばれるのは死後の世界である。しかし、死後の世界で間違いなく、結ばれるかどうかについて、この詩の最後の二行で、ディキ

ンソンは考える。

「重々しさ」とは、墓の中の重々しさのことである。「期待」とは、恋人が死後、墓にやって来るだろうという期待である。しかし、必ず恋人が来るとは限らないという「恐れ」があるのだ。

今まで、“renunciation”についての詩を6篇、考察してきたが、次には“renunciation”の定義をしたような詩、745番の詩について考えてみたい。

Renunciation — is a piercing Virtue —
The letting go
A Presence — for an Expectation —
Not now —
The putting out of Eyes —
Just Sunrise —
Lest Day —
Day's Great Progenitor —
Outvie
Renunciation — is the Choosing
Against itself —
Itself to justify
Unto itself —
When larger function —
Make that appear —
Smaller — that Covered Vision — Here —

訳してみると、次のようになる。

断念とは — 突き刺す美徳 —
現存を
捨て — 期待を得ること —
今を否定するのだ —
目をなくすのだ —
日の出だけでよいのだ —
昼が —
昼の偉大な創始者に —
打ち勝つといけないから
断念とは — 自分自身に反して
選ぶこと —
自分自身を
自分自身に正当化するためだ—
より大きな機能が —
あのものをより小さく見えさせる時 —

あのものとは — ここの — あのおおわれた視野 —

ディキンソンは「断念」を美徳と捉えている。しかし美徳といっても、嬉しくなるようなものではない。自分の心を突き刺すような、苦痛を伴うようなものである。この世での満足を諦め、あの世での満足に期待を寄せるのである。

「目をなくすのだ — / 日の出だけでよいのだ — 」という詩行については深い考察が必要である。「日の出だけでよい」というのは、愛したということだけでよいというのだ。「目をなくすのだ」というのは、その愛が成就しなくてもよいというのである。

次に、「昼が — / 昼の偉大な創始者に — / 打ち勝つといけないから」について考えてみよう。「昼」というのは、愛が成就された状態を示すものである。「昼の偉大な創始者」とは、「日の出」のこと、つまり、成就しなくても、愛したという状態を示すものである。ディキンソンは、結局、愛は成就しないほうがよいと言っているのだ。

「断念とは — 自分自身に反して / 選ぶこと — 」以下、終わりまでの詩行について考えてみたい。Robert Weisbuchはこれらの詩行について 、"To paraphrase these badly crabbed lines, renunciation must renounce itself at the appropriate time."[7]と言っている。彼は、"Against itself"の"itself"を"renunciation"のことだと考えているようだが、私は、次のように考える。断念するのは、人である。自分自身に反して選ぶのは人である。"itself"は人を表すように思われる。"himself"や"herself"でなく、あえて性別を表すことのない"itself"を用いているのである。断念しないほうが楽だとしても、その楽な道に反して断念の道を選ぶのである。なぜそうするのであろうか。ディキンソンが忍耐を極めてこの世を生きていくのは、死後において理想の世界が待っていると思っているからなのである。死後になってこそ、ディキンソンの信じる愛は成就されると考えているのである。

「自分自身を / 自分自身に正当化するためだ — 」というのは、この世で断念をしたことが正しかったことを証明するためだ、というのである。いつ証明するかというと、天国に行った時である。天国では、より大きな機能が得られて、すなわち、より良く目が見えるようになって、この世での視野が小さなものに思われるのだ。この世での視野は、つまらない欲望で曇っていて、狭くなっているのである。

「日の出」というのを愛のことだと考えてきたが、詩人としての自覚だと考えることもできよう。日の出だけで、昼間はいらないというのは、自分が詩人として自分独自の詩を書いているという自覚があれば、この世で人に認められなくてもよいというのである。

註

1) Helen Plotz, "Emily Dickinson Herself" in *Poems of Emily Dickinson* ed.Helen Plotz (New York: Thomas Y.Crowell Company, 1964), p.xvi.

2) Thomas H. Johnson, "Introduction" in *The Complete Poems of Emily Dickinson* ed. Thomas H. Johnson (Boston: Little, Brown and Company, 1960), p.viii.

3) Thomas H.Johnson (ed.), *The Complete Poems of Emily Dickinson* (Boston: Little Brown and Company, 1960) エミリー・ディキンソンの詩の引用はすべてのこの版に拠る。

4) Richard Wilbur, "Sumptuous Destitution" in *Emily Dickinson: A Collection of Critical Essays* ed. Richard B. Sewall (Engelwood Cliffs: Prentice-Hall, Inc., 1963), p.131.

5) Robert Weisbuch, *Emily Dickinson's Poetry* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1975), pp.16-7.

6) Rebecca Patterson, *Emily Dickinson's Imagery* (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1979), p.51.

7) Weisbuch, *op. cit.*, p.174.

参考文献

Capps, Jack L. *Emily Dickinson's Reading*. Cambridge: Harvard University Press, 1966.

Farr, Judith with Louise Carter. *The Gardens of Emily Dickinson*. Cambridge: Harvard University Press, 2004.

Rosenbaum, S. P. *A Concordance to the Poems of Emily Dickinson*. Ithaca: Cornell University Press, 1964.